## ドライバーたちの〝夢〟

# 日韓トンネル建設で「操る楽しみ」体感へ

VERTISは昨年十一月、日米欧の関係者を集めて国際会議を開催した。会議では、ITS（実現目標二〇一五年、米欧では別名）の導入により、「交通渋滞による経済損失を解消できる」（欧州関係者）、「事故を未然に防止することで、保険料を低減できる」（米国）、「二酸化炭素の排出量を約一五%削減できる。車載機などで二十年間に約五十兆円の市場創出が見込まれる」（日本）など希望的な報告が続いた。

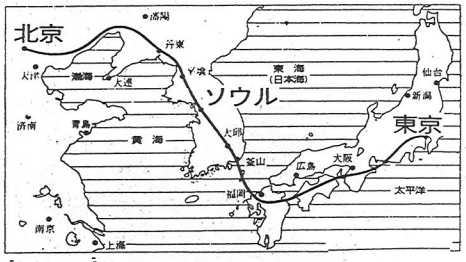
ただ悲しいのは、わが国の高速道路（高規格幹線道路）は総延長六千キロに過ぎず、少々渋滞が緩和される程度では、いつまで経っても「車を操る楽しみ」を味わうことはできないということだ。

ユーロトンネルの開通によって、英国のドライバーはいったん車を列車に乗せさえすれば（カートレイン方式で移動）、欧州大陸をドライブすることが可能になった。わが国のドライバーがユーラシア大陸をマイカーで走り回れる日は、果たしてやって来るのか。

九州と釜山（韓国）を陸続きにしようという「日韓海底トンネル」（構想）は着々と実現の方向に進んでいる。というのも、韓国・建設交通部（建設省に相当）が昨秋、同トンネルを建設して、日韓両国の鉄道を連結、さらに、仁川港と中国の連雲港間に乗り継ぐ連絡船を運行し、日・韓・中の「東北アジア圏大陸交通網」を構築するという方針を公表したのである。

国土庁も今度の新しい全国総合開発計画（目標二〇一〇年）の中で、「アジアとの交流・連携を積極的に推進する」として、同トンネル構想を念頭に置いた国土計画を目指しているといわれており、同構想は二十一世紀の目玉プロジェクトになりそうだ。

これまで、車の開発では環境問題、安全対策など技術面ばかりが強調され、車本来の「操る楽しみ」は十分に考慮される状況ではなかった。ITSを始めとするインフラ面でのインテリジェント化が国際的に検討されるようになった今、ドライバーの意のままに操れるどこまでも走れる「未来カー」の出現は、意外に早く訪れてくるかもしれない。




東アジアハイウエーの予想ルート図